

幼稚園における動物介在教育の実践

——幼児の動物とのかかわりの様態の変容——

永井 理恵子¹⁾・溝口 綾子²⁾

1) 帝京短期大学 こども教育学科 2) 帝京めぐみ幼稚園／帝京短期大学 (非)

【抄録】

【問題・目的】帝京めぐみ幼稚園では2006年より17年間にわたって「動物介在教育」を実践してきた。この実践は帝京科学大学教育人間科学部こども学科の動物介在システム研究室と連携しておこなわれている教育活動であり、開始時より一貫して在園児と保護者の興味関心が大きい活動である。昨年度は特に、この活動にかかわる保育者の意識の変容に焦点を当てて分析を試みたが、今年度は幼児に注目し、動物とのかかわりの様態の変容の考察を試みる。

【方法】2022年4月から9月までに実施された「動物介在教育」全5回を参観し、年少・年中・年長児と動物とのかかわりの様態の変容を写真および観察記録から描出した。併せて教諭へのアンケートを2回、保護者へのアンケートを1回、実施し、観察分析の参考として用いた。

【結果】年少、年中、年長の幼児と動物とのかかわりの様態は、年齢的な発達段階と、動物介在教育の経験の差により違いが顕著に見られた。すなわち、年少児においては今回、初めて動物に身近に触れる幼児もおり、総じてまだ動物への接触に恐怖心も垣間見られ、教諭の支援が必須であった。年中児においては動物に対する愛情が芽生え親しみをもって関係性を構築している様子で、自らの生活の在り方に照らし合わせて動物の生態を想像する姿が見られたが、いまだ介在者や教諭の支援は不可欠であった。年長児になると動物に対する科学的探究心や知的好奇心が確認され、積極的・主体的に自ら動物とのかかわりを創造している姿が確認された。

【考察】今回の調査により以下の点が確認された。1) 命あるものとして身近な動物に接近する初期段階である幼児期において、動物に触れ合う正しい姿勢や方法を学んだうえで接近することは重要な意味がある。そうすることによって動物との望ましい関係性が構築される。2) 動物とのかかわりの様態は上記【結果】にも示したように、学年による違いが顕著である。低年齢であればあるほど教諭の支援は重要であるが、学年が上がるに連れて動物と自分とのかかわりの様態も個人差が顕著になるとともに専門職である介在者の支援が重要な位置を占めるようになる。3) 介在者は動物と五感で触れ合えるようプログラムを工夫しているのみならず、知的、造形的なアプローチ方法も提供し、多様な活動をとおして幼児(ヒト)と動物との望ましい関係構築の試みをおこなっている。

【キーワード】動物介在教育, 幼児, 幼稚園教育要領

I. 問題・目的 (はじめに)

帝京めぐみ幼稚園(以下、本園という)では2006年より17年にわたって「動物介在教育」を実践している。この実践は、本園と同系列にある帝京科学大学の教育人間科学部こども学科の動物介在システム研究室および花園誠教授と連携しておこなわれている教育活動であり、実際の動物との触れ合い体験を意図的に計画し実践しようとするものである。この活動については

溝口が「幼稚園における動物介在教育の実践—身近な動物とのふれあい体験を通して—」(日本教材学会発行『教材学研究』第18巻 2007年3月, 219-226)と題した論文にまとめている。この論文中において溝口は、2006年度に実施された3回の実践の概要(対象児, 参加介在者, 動物リスト, プログラム内容など)を示したうえで、活動中の様子を八つの事例を挙げて紹介し、保護者へのアンケートも併せて、この活動の全体像を描出している。加えて永井は2018年度

より、本園の「動物介在教育」に触れる機会を得、興味関心を抱き、定期的に観察を実施した。2021年度には特に教諭らが「動物介在教育」に対して抱いている意識の実態に注目し、園長と教諭らの協力を得て調査を実施し、「幼稚園における動物介在教育にかかわる保育者の意識の変容」と題して事例報告をまとめた（『帝京短期大学紀要』No.23;165-174,2022）。

本年度は、4月より月に1回のペースで定期的に行われている動物介在教育を追跡調査し、動物との触れ合い場面で幼児が示す動物とのかかわりの様態の変容に注目して、その変容を明らかにすることを目的として調査研究を試みた。

なお、2020年度からのコロナ禍により2020年度は実施が中断、2021年度から再開したものの月1回の定例開催は困難であった。2022年度は4月当初から月1回の定例開催が復活したが、動物介在システム研究室が東京西キャンパス（山梨県上野原市）にあり県境を越えての介在者および動物の移動の完全復活が困難であるため、花園誠教授がアドバイザーを務め同研究室の卒業生によって運営がおこなわれている「こども動物教室アニマルシップ」（東京都足立区）の紹介を受け、運営を移譲して実施している。ここでは「子ども達に本物の体験を！」をねらいとし、①動物を連れて行き、触れ合いを中心とした内容を提供、②スタッフは動物介在教育の有識者で、子育ての経験者、③動物たちは選ばれた安全な動物（SPF動物・検査を受けたクリーンな動物）であることを特徴としている（同ホームページより）。

II. 方法

1. 調査対象者

実践観察調査においては、幼児（園児）を調査対象とするが、研究内容に応じて時に教諭や動物介在教育介在者も対象となる。

また、アンケート調査を数回、実施しているが、この際には教諭および保護者を対象としている。

2. 調査時期

2022年度4月の第1回を今回の研究の開始とし、以下の日程で調査を実施している。

(1) 観察調査

- 1, 4月26日（火）
- 2, 5月24日（火）
- 3, 6月21日（火）
- 4, 7月11日（月）
- 5, 9月14日（水）

(2) アンケート調査

- a. 教諭に対して 4月, 5月 各1回
- b. 保護者に対して 5月 1回

3. 調査内容

(1) 実践観察調査

調査方法は自然観察法を用い、幼児の様子を筆記および写真で記録し、両者を併せて「動物とのかかわり」に注目して分析した。調査は溝口と永井が共におこなった。

(2) アンケート調査

教諭に対して2回、保護者に対して1回のアンケート調査を実施した。教諭に対しては、「触れ合いの方法」「動物とのかかわりと幼児の状態」「コロナ禍における配慮と場所の設営」「保育者（担任）としての援助」「次回に向けて」の各項目を立てて、自由記述を求めた。保護者アンケートの内容は後述する。

4. 倫理的配慮

本論は特に倫理的配慮が必要な点、個人情報懸念される内容を含むものではないが、保護者からは研究のための写真撮影の許可および研究関連文書への掲載許可を得ている。

III. 結果（調査結果）

1. 実践観察調査

(1) 2022年4月26日（火）：小型犬との触れ合い

1) 活動の概要と時間運営

今年度初回となるこの日は、以下の概要で運営された。

介在者3名

犬6頭

- ① くるみくん（プードルとキャバリアのミックス）（小型）10歳
- ② さくらちゃん（プードルとピジョンフリーゼのミックス）（小型）
- ③ メルクン（ダックスフント）（小型）
- ④ 風（ふう）くん（ミニチュア・ピンシャー）

(小型)

⑤ BORUTO (ボルト) くん (ボーダーゴリー) (中型)

⑥ まるくん (ボーダーコリーと柴犬のミックス) (中型)

10:00～10:15 ほしぐみ (年少) 保育室にて

10:15～10:30 つきぐみ (年少) 保育室にて

10:40～10:55 にじぐみ (年中) ホールにて

11:00～11:15 そらぐみ (年中) ホールにて

11:20～11:35 やま2くみ (年長) ホールにて

11:40～11:55 やま1くみ (年長) ホールにて

活動の流れは全て同じで、以下のとおりである。

a. 幼児たちは定位置に座って待機，介在者の話を聞く。

b. 犬との正しい近づきかたと触りかたの指導を，犬に触る前に口頭で受ける。

<方法>

最初は握りこぶしで匂いを嗅がせる

→掌を開いて鼻先に近づける

→触る時は上から触らず，背中を首から下へ向かってそっと撫でる

→慣れてきたら頭も触って良い

→年長児のみは膝に乗せる

→大声を出さないようにする (犬が驚くため)

c. 3グループに分かれ，各1頭ずつを介在者が連れてきて順に触れ合いタイムを過ごす。

触れ合いの最初は，握りこぶしで匂いを嗅がせ，続いて掌で触る。これを基本に，学年が上がるに連れて接しかたが深くなり，年長クラスのみ最終的に膝に乗せるところまでに至る (小型犬のみ)。

2) 接触の様態

<年少>

年少児においては積極的に接する幼児は極めて少なく，積極的にかかわっていた様子が見られたのは僅か1名であった。動物介在教育が初回なのであるから当然であろう。幼稚園において哺乳類を間近に見るのは初めてであり (幼稚園に哺乳類は飼育されていない)，家庭で犬を飼っている幼児の他は殆ど初めて犬に接する幼児も多いものと思われる。最初に犬を見た時は「怖い」という言葉を発する幼児が多くいたが，介在者が説明し教諭の援助のもとで犬と接する段階になると，怖がる幼児は殆ど見られなくなった。幼児が不慣れな動物 (しかも小型犬といえ

ども犬なので相応の大きさがある) と触れ合うためには，信頼できる大人 (教諭) の存在が非常に大きいことが確かに見られた。

幼児の表情は，喜んでいる表情や探究心などを感じさせるものではなかったが，殆どの幼児が強い興味関心を抱いていることが十分にうかがえる表情を見せていた。触りかたは「おっかなびっくり」という様態であったものの，介在者の指示により，介在者や教諭に支えられると大人と一緒に触り，その手触りやぬくもり感に強く心が動いているであろう表情が印象的であった。



写真1 小型犬との触れ合い (年少児)

小型犬とのふれあい場面における年少児の様態は，心を奪われたような姿を見せ，目を見開いて静かに見つめる様子が確認できた。年少期から小型の哺乳類に接することは，生命に対する畏敬の念を育てるのに非常に重要であると確信した。

<年中>

介在者の解説を，ときに頷きながら真剣に聞く姿が確認できた。「怖い」という声は殆ど聞かれない一方，小さな声で「可愛い」と呟く声が多くの子から発せられていた。マスク越しではあるものの，多くの幼児の目が微笑んでいることがわかった。

触れ合う段階では，怖がるよりも積極的に手を差し出す幼児が多い。自分のグループに犬が運ばれてくると，小さな声で「わ～」と言っている幼児がおり，幼児の心の高まりが伝わってくるようだった。触る段階になると優しいまなざしで眺めつつ，掌で愛おしそうに撫でる様子が多く確認できる一方，触るのを躊躇していた

幼児を教諭が見つけて傍に寄り、一緒になって触っている状況も確認できた。

「くるみちゃんは何歳?」「(BORUTOに向かって)見たことあるよ!」「歯が小さいね」など自分から積極的に質問したり観察したりする様態も見られ、大人に言われてではなく自らすすんで犬を観察しようとする知的好奇心の芽生えを確かに見ることができた。終了時には犬がケージに入れられても目を離さず、ホールから退出する際にも名残惜しそうにし、犬に「バイバイ」と言って手を振る姿が見られた。

年中児になると、動物に対する愛着や知的好奇心など、情動的かつ知的に接する様態が呈示されていた。

<年長>

既に経験があるため、犬との接触方法については一応、理解している。「あ、この犬、知っている」「ちょっと歯を見せて」「この犬は、なんという犬?(名前ではなく犬種を問うている)」「生クリームみたい(くるみくんを見て)」など、口々に発言や質問が幼児から出ていた。一つの班には、まるくん(中型犬)が連れてこられたが、この班の幼児たちが犬と触れ合っている時の表情は笑顔ではなく極めて真剣なまなざしで、言葉も発さず触れている表情に、年長らしい科学的探究心の育ちを強く感じさせられた。家庭や園での中型犬の飼育は環境整備の点からなかなか困難な場合も多いので、こうした機会に間近に触れることのできることは大きな意義があるものと考えられる。

年長児の犬との触れ合い場面における様態で印象的だった点は、幼児一人ひとりで見せる姿に違いがあったことである。年長児ともなると怖がる幼児はおらず皆が積極的に犬とかかわっていたが、かわりかたには個性が見られた。人間の友のように言葉を掛けたり親しげに接して犬と自分との関係を作り他者を寄せ付けない幼児、友とともに楽しく話しながら犬に接する幼児、犬をじっと見て魂を抜かれたようになっている幼児、介在者に次々と質問を投げかける幼児など、それぞれの幼児なりの在り方で動物と自分との関係を構築している様態に大きな発見を得た。

3) 全体をとおして

生物と接する時は姿勢を正して敬意と誠意をもって接することを最初の段階でしっかり伝え

る介在者の姿が印象的である。そうした導入をすることで動物は単なる「愛玩物」ではなく命をもった仲間であることを幼児期の段階から教示することは、非常に重要である。幼児らは、介在者が言葉だけでなく実際に動物たちを大切に可愛がっている様子を目にすることもでき、視覚的にも体感的にも動物愛護の精神や科学的探究心を育てることができる。

幼児が犬と接する様態は、学年を追うに連れ、犬に対する認識が「なにやらよくわからない異形」→「可愛らしい愛着の対象」→「自分とは異なる生態を持つ興味深い研究対象」と変容していっている。それは大変に明らか且つ顕著に確認できることであり、動物介在教育の経年的教育効果を示すものであった。

(2) 2022年5月24日(火): モルモットとの触れ合い

1) 活動の概要と時間運営

今年度第二回の今回は以下の要領で実施された。

介在者 2名

動物 モルモット 6匹

クリームちゃん、ブルーベリーちゃん、ずんだちゃん、チョコちゃん、マスカットちゃん、ベにいもちゃん

(モルモットは区別が付かないため頭部に色が付けてあり、その色が名前になっている)

10:00～10:40 年少2クラス(ほしぐみ、つきぐみ)

10:45～10:58 にじぐみ(年中) 保育室にて

11:03～11:20 そらぐみ(年中) 保育室にて

11:23～11:40 やま1くみ(年長) 保育室にて

11:42～12:05 やま2くみ(年長) 保育室にて

活動の流れは全て同じで、以下のとおりである。

- 幼児が定位置に座る。
- モルモットの触りかたの指導をする。犬のように握りこぶしで匂いを嗅がせる必要はないことを介在者が口頭で伝える。頭のほうから尻に向けて一方方向でそっと撫でるようにする、大声を出さない。
- 幼児に脚を投げ出すようにして座るように介在者が指示し、プラスチックの籠に入れたモルモットを一人ずつ順番に脚に乗せて触るように指導する。
- 幼児たちを、モルモットを入れてある籠の

周りに集めてモルモットを見せながら「なんの仲間かな?」「なにを食べるのかな?」などと介在者が質問する。

2) 接触の様態

<年少>

介在者の説明の場面では、殆ど幼児がモルモットへの接触は初めてであると想定され、介在者の様子をじっと静かに見つめていた。怖くて触れないという幼児は殆ど見られず、介在者や教諭の言葉がけに促されて触ってみることができると、特に教諭は常に傍らに寄り添っている。幼児もそれを感じ取り、それによってモルモットに触れる勇気を得ているものと想定される。

一人ひとりの幼児の表情やつぶやきから、前回の犬と比べて体の大きさや顔の形の違いを掴むとともに、犬と比べて小型である外観（膝に乗る大きさ、白い毛並み、赤い目に小さい口・鼻・耳）に安心感を抱いての所以もあるか、最終的には全員が触ることができた。自分だけでは触ることが難しく躊躇している年少児でも、教諭や友人とともに触れるという状況にあって触ることができている。仲間とともに、目の前の小動物を見たり触れたりする体験は、年少児にあって、自分と同じ命をもった生き物の実際を体感する非常に貴重で有意義な機会となっている。

<年中>

介在者の話を興味深く聞き、頷いている様子が見られる。やはり触ることには抵抗があり難しい幼児が散見されるが、多くの幼児が介在者に「触っていい?」と言葉で訊く、ないしは介在者の目を見てアイコンタクトで確認してから触るという行動を取っていたのが特に記憶に残る。年中児になると自ら手を出して触ろうとするところまでは到達するものの、最後の一息において大人に確認してから行動に出る。この介在者とのアイコンタクトにはおそらく、幼児によってそれぞれ多様な意味が込められているものと想定される。それでもなかなか手が出せない幼児もいたが、最終的には傍らに寄り添う教諭と一緒にわずか少し触れるようになった。年中児においては、動物と自分とを繋ぐ仲介者の援助が大変に重要であるものと見受けられる。

動物への言葉かけが非常に多く聞き取れたのも年中児の特徴と言える。「(自分の) お腹が減っ

てきたけど(昼食時に近いから)、ごはんは何を食べるのかな?」「毛がサラサラしてる」「目が赤い」「匂いを嗅いでる」「眠そうにしてる～。寝てもいいよ～」「(みんな) 静かにしてなくちゃダメだよ」など、優しい口調でモルモットに話しかけたり、一人でつぶやいたりしている。「眠そう・・・寝てもいいよ」「ごはんは何を食べるのかな」など、自分の生活に重ねて動物の暮らしぶりを想定して語り掛けたり、「目が赤い」「毛がサラサラ」など、自分の身体と比較しやすいパーツについて観察していることが確認できる。年中児にとって小動物は完全な他者ではなく、自分のありかたに重ね合わせて見ている様態が特徴的であった。

<年長>

籠に入ったモルモットが自分のところに来るまでは一列に並んで座って待つように指示されているが、年長児は興味関心が強すぎて順番を待ちきれず近寄ってしまう幼児が続出するため、Iの字に並んで座って待たなければならぬところがJの字になってしまう。介在者の指示が守れないというよりも、早く見たい思いが強すぎて身体が抑えられないといった様態である。それと並行して幼児たちから介在者へ大量の質問が出され、触っているあいだ見ているあいだを問わず「目を合わせたい」「こっち見てよ」「なんで?」「どうして?」という発言が次々と出され、介在者は返事に忙しい。「どうして屋根に穴が開けてあると思う?」という介在者の問いかけに「空気、空気を入れてるんだよ」と答えたり、プラスチック容器を運ぶ介在者に「重くないの?」と声を掛けたりしている。さらには「また来月、なにか連れてきますね」と言った介在者に対して「ねえ、パンダは?ライオンがいい」と言って介在者を困らせたりしていた。

やま1くみ、2くみのいずれにおいても、年長児の興味関心の強さは目を見張るものがあった。何度も注意しても列はJの字になってしまうし、まだ触っていいと言われていないのに自分から籠に寄って行って手を入れようとする幼児も続出して、介在者は幼児一人ひとりにモルモットを見せながらも、押し寄せてくる幼児たちを制止するのに難儀していた。これは、年長児が介在者の話がわからないとか、指示が守れないといったことではないと判断する。なぜならば、介在者や教諭から「もとの場所に戻って」や「ま

だ触らないで」と言われると、気づいて弾かれたように元の場所に戻る姿が確認されたからである。それでも、どうにも我慢できず、つい寄って行ってしまう年長児の様態を目の当たりにし、年長児ともなるとこれほどまでに科学的探究心が強くなるのだということを確認することができた。年長児の、生物に対する科学的探究心、知的好奇心の大きさは測り知れない。

3) 全体をとおして

今回も3学年の幼児の姿を観察したが、1年ごとの成長が実に著しく、大変に興味深いことが今回も確認できた。また、種は異なるものの回数を重ねるごとに幼児と動物の関係は一步ずつ深まっていることや、動物への興味関心も回を追うごとに深まっていることも確認できた。年少児も（第一回に比べて）今回は、相手が小動物であったこともあり、全員が触ってみることができた。もちろん、介在者や教諭の援助があってこそであることは言うまでもない。

年中児になると介在者の目を見て確認することによって、教諭の援助を得ずとも触れることができるようになってきている。とはいえ、介在者を信頼して小動物に手を出すことができる背景には、幼稚園という安心できる場で、信頼できる教諭が見守ってくれているという土壌があってこそであることは忘れてはならない点である。

さらに年長児の6月ともなると、周囲の環境に対する幅広い視野も身に着け、知的好奇心も更に強くなって、動物や介在者に果敢に向かっていく様態が確認される。幼児が自ら進んで環境に接触し、自己の世界を拡大していく姿を目の当たりにし、驚愕するばかりであった。活動の後、とある年長児が一人で介在者を追いかけ行き、次回はパンダやライオンを連れてきてくれと言っていた場面からは、身近な小動物に触れた経験が幼児の知識に内在していた身近でない動物を想起させ、身近でない動物にも思いを至らせていたことを知ることができ、おおいに驚かされた。本園では、こうした幼児の科学的探究心の育成を目指し、保護者会の主催による移動動物園でのヤギやポニーとの触れ合い、動物園や水族館への園外保育など、多種多様な動物との出会いの場を幼児に提供しているが、広い世界に生息する動物へ関心を抱く第一歩として、本園の動物介在教育が大きな役割を担っているということができよう。

(3) 2022年6月21日(火)：モルモットとの触れ合い

1) 活動の概要と時間運営

今年度第三回の今回は以下の要領で実施された。

介在者3名

動物 モルモット3匹

ブルーベリーちゃん、ずんだちゃん、べにいもちゃん

(モルモットは区別が付かないため頭部に色が付けてあり、その色が名前になっている)

10:00～10:40 年少2クラス(ほしぐみ、つきぐみ)

10:45～10:58 にじぐみ(年中)保育室にて

11:00～11:15 そらぐみ(年中)保育室にて

11:20～11:40 やま1くみ(年長)保育室にて

11:45～12:05 やま2くみ(年長)保育室にて

活動の流れは全て同じで、以下のとおりである。

前回のモルモット触れ合い体験を踏まえ、今回はモルモットをよく見てじっくり観察し、それを「モルモットうちわ」にするという製作活動に繋げていた。

今回のモルモットは3匹であった。

- a. 今回は机を出し、各机に数人の幼児を対面式に座らせた状態で活動が開始された。最初は介在者の話を聞く。介在者から「モルモットうちわ」を製作するという話も、ここでおこなわれた。介在者が、手持ちのホワイトボードに描かれた枠に、説明をしながらパーツの部分の磁石で貼っていく。その際に、目の色や位置、耳の色や位置、口、しっぽがないことなどの確認を問答形式でおこなっている。この段階でホワイトボードに加え、うちわにパーツを既に貼った完成品がサンプルとして幼児に見せられる。また同時に、今日はモルモットには触らずに観察だけにしようとの指示が出た。
- b. 各机に、プラスチックの水槽にモルモットが一匹ずつ入ったものが一つ置かれる。モルモットがじっとしているように固形の餌が与えられている。幼児は、まずそれをよく観察する。この際に、よく見るように介在者から指示もあるが、指示がなくても幼児たちは興味深そうにモルモットを見ていた。上部の隙間から手を差し入れようとする幼児もいて、介在者に止められる光景も

見られた。

- c. うちわとパーツが配布される。介在者は、ホワイトボードに磁石でパーツを貼ったものや、サンプルうちわを手にしなが、幼児のあいだを回って援助している。
- d. 幼児は、介在者手持ちのサンプルと、実際のモルモットの双方を見ながら製作をしていた。
- e. パーツを貼り終えた幼児が増えてきた段階で介在者から、各モルモットについている色を各自で塗るように指示が出た。幼児はロッカーから個人もちのクレヨン、色鉛筆、マーカーなど好きなものを持ってきて、各自の机上のモルモットの頭部に塗られた色と同じ色を塗っていた。
- f. モルモットに、一緒に過ごしたお礼と別れの挨拶をし、担任教諭に完成したうちわを渡して終了となった。

基本的に今回は全学年ともにこの流れで進められていたが、学年、クラスによって幼児の製作に特徴があった。同じ活動でも、実作に違いが見られた点が興味深い。

2) 接触の様態／全体をとおして

今回は、全体を総括して、興味深かった点を記述する。

活動は上記の流れで進んでいったが、介在者から「よく、ずんだちゃん見てあげてね」などの言葉かけがおこなわれている。

これに対し年少児（ほしぐみ・つきぐみ）は、短時間で何をすればよいのかを把握して取り組むことの難易度が少々高かったようであった。最終的には介在者や教諭の援助を受けて何とか全員が仕上がり、完成したうちわを持って楽しそうにする様子は見られたものの、年少児に適したレベルの活動であったかは再考の余地があったように感じられる。

一方、年中児（そらぐみ）は、「はじめてつくる、モルモットうちわだ」「よく考えて作る」「〇〇ちゃんのほうを見てるね」などと小声でつぶやきながら製作していた。基本的には介在者が手に持っているうちわに大きな影響力があるようで、多くの幼児がうちわにそっくりな位置にパーツを貼っていた。大人の発するメッセージをよく聴き取り、それに倣おうとする本園の年中児の姿が確認された。注意深く話を聴き、それを受け取り表現する素直な姿勢を見ること

ができた。

ここで興味深いことが起きた。介在者が作成したモルモットうちわは、耳が両耳とも、蒲鉾型の上部が曲線で下部が直線に貼られていたし、ホワイトボードにマグネットで貼ったサンプルも同様になっていた。ところが途中で一人の幼児が「お耳は下を向いているから下向き」「お耳はちょっと下にあるの」などと呟き、介在者作成のサンプルとは上下反対に耳を貼った。これを見ていた介在者が「よく見てるね、そうだね～」と答えた。



写真2 モルモットうちわの製作（年中児）

これを踏まえてか、次に活動がおこなわれた年長やま1くみでは、介在者が幼児の前で作って見せるホワイトボードの耳を、先の年中児（そらぐみ）でおこなったのは天地逆の向きで介在者が貼った。つまり、既に作成して持ってきたモルモットうちわのサンプルと、その場でやって見せたホワイトボードのサンプルとで、耳の向きが上下反対になったわけである。これにより、やま1くみの幼児たちは、耳の天地が異なる2種のサンプルを同時に見せられることになった。

年長児はさすがに観察力が鋭く、実物のモルモット、うちわサンプル、ホワイトボードサンプルの三つを見比べながら真剣な表情でパーツを貼っていく姿が見られた。結果として、やま1くみでは、耳が上向きと下向きのうちわが混在することとなった。年長児は介在者の言葉だけでなく、実際のモルモットを非常によく観察している姿が印象的であった。パーツを貼るという活動それだけでは年長児には容易なことであつたろうが、どの位置に貼るかを、実物を模

倣して決めるということは、動物の十分な観察と表現という高度な活動が求められ、年長児ともなると集中して取り組む姿が見られた。

続いてやま2くみ（年長児）の活動となった。この組では1くみに加え更に興味深い様子が確認された。耳や目の両方ないしは片方を、うちわの裏面に貼る幼児が出現したのである。動物を三次元の立体として捉え、それを二次元の平面に再現しようとする際に裏面を用いるという行動に出る幼児が複数人、確認された。この表現をした全ての幼児が1テーブルに集中していたため、一人の幼児に周囲が感化されたのではないかと考えられる。また、やま1くみで見られた「耳を天地逆に貼る」様子も多く確認された。介在者に「よく見てね」と促され一斉に水槽のなかのモルモットに向かって幼児たちの頭の向きが動く様子は目を見張るものがあり、年長児の集中力と、人の話をしっかり聞いて知的な刺激を受け、それを取り込んで主体的に情報を獲得しようとする姿は驚くばかりであった。「鼻は何処にあるかな？よく見てね」と言われた時、モルモットの尻のほうに座っていた幼児が反射的に席を立ててモルモットの顔のほうに回り込み鼻の位置を確認して席に戻った姿が確認でき、年長児の知的好奇心の強さと、援助の言葉が及ぼす影響力に驚愕した。この活動に入る前に教諭から指導を受けて少し泣きながら活動に入った幼児が2名いたのだが、活動に入ると見る見るうちに活動に引き込まれ気分が変わっていく様子が表情の変化から読み取ることができ、動物そのものと、この活動のもつ強い力を観察することができた。

今回の活動は、活動そのものの難易度は高くなく、また介在者がサンプルを見せてから取り組む活動であり、主体的な表現が展開しにくい活動かと思われがちなものであった。しかし、実際に幼児たちの取り組む姿を観察していると、以上に述べたような多くの点が明らかとなり大変に興味深かった。

・幼児は、大人の言葉かけや援助に耳を傾けており、保育において幼児と動物とを繋ぐ大人の役割の大きさを改めて感じたこと。

・幼児は、実物とサンプルの両方をよく見つめていること。

・サンプルが実物と異なっていることに気付いた時、幼児は自分が確かに見た実際の姿をしっ

かりと取り入れる主体性を有していること。

・「貼る」というだけの活動でも、そこに幼児たちの神経が集中し、一人ひとり、その幼児なりの感性と知性で環境を取り入れ、表現しているということ。

こうした事実を目の当たりにし、改めて大人（介在者や教諭、保護者など）は、自然環境と幼児とを繋ぐ重要な役割を持っているということに自覚しなければならないと感じた。

また、大人がイメージや感覚や主観でとらえがちな自然の様相を、幼児は自分の目で見て事実をしっかりとつかんでいく力をもっていることも確認できた。

(4) 2022年7月11日（月）：すなねずみの観察

1) 活動の概要と時間運営

今年度第四回の今回は以下の要領で実施された。

介在者3名

動物 すなねずみ9匹（各クラス3匹×3箱）

10:00～10:35 ほしぐみ（年少）保育室にて

10:40～10:55 そらぐみ（年中）保育室にて

11:00～11:15 やま1くみ（年長）保育室にて

11:20～11:35 やま2くみ（年長）保育室にて

（つきぐみ（年少）、にじぐみ（年中）活動なし）
活動の流れは全て同じで、以下のとおりである。

- 今回は、すなねずみの観察である。三つのプラスチックケース（大型）と小テーブルを持ち込み、各クラス3グループに分けて活動していた。各ねずみは「〇〇さん」と一家のような名前がある（「木村さん」など）。
- すなねずみは箱の中に入れられており、なかには木屑が敷き詰められ、二階建てになっていて、木の階段のようなもので二階に上がれるようになっている。プラスチックの小さな容器に砂が入ったもの、プラスチックの土管のようなもの、お菓子の空き箱が入れてあり、すなねずみが二階に上がり降りしたり、土管のなかを通ったり、砂のなかに入ったりするのをプラスチックの外から見るができる。
- 今回は、出して触るのではなく、目で見えて観察し、気づいたことを各班にいる介在者に話して伝える観察学習のような活動であった。最後にワークシートが配られ、中

には絵で「たちあがる」「ほりほりする」「のぼる」が描いてあり、それをしているのが確認できたらシールを貼る活動をしている。
3 学年とも同じ活動であった。

2) 接触の様態／全体をとおして

<年少>

ほしぐみでは、「小さいおてて」「爪がついてる」などと少し発言があるが、発言はとても少ない。ねずみが小さくて特徴を掴むのが難しいのと、年少児にとってはケース越しの動物にあまり親近感が湧かないのかも知れないと感じた。

<年中>

そらぐみでは、「しっぽがながい」「猫みたいな髭がある」「モルモットに似てる」「しっぽが長いね」「あっちは、どうなってんだろう・・・」(隣を見ながら) などと言いながら、皆で押し合いながらじっと凝視していた。あまり見慣れない小動物に対して、見慣れている動物に照らし合わせながら観察している様子が興味深い。

<年長>

やま1くみでは、動物の動きに合わせて一斉に幼児たちが立って移動している様子が印象的であった。「下に何か敷いてあるよ・・・木かな・・・」と言いながら凝視する幼児がおり、周りにいる友達と皆で固まりになって見ていた。他にも「坂を登っているね」「脚を引っかけて登るんだよ」と、こまかく動きを観察する姿が確認できた。ワークシートが配られると指示を待たずにひらがなを読み始め、「た・・・ち・・・あ・・・が・・・立ち上がるだ」と読んでいた。

やま2くみは前回に引き続き、発言が非常に多いクラスであった。介在者の言葉がけに応じて一斉に動きながら箱のなかを見ており、反応が非常に速い。「筒に入らないね」「下には何が敷いてあるの?」「滑らないように敷いてあるんだよ」「黒い爪がついてる」「眠そうにしてるよ」「頭を、こうやってた(頭を撫でる仕草)目を、こうやってた(目をこする仕草)」「ガリガリしてた」など、筆記での記録が追いつかないほど活発な発言が確認された。

3) 全体をとおして

今回は動物に触れることのない、いわゆる観察であったためか、年長児はとてもよく見ていた一方、年少児は介在者の言葉がけにも大きな反応はなく、まだ実態がつかめていないような

様子であった。

今回の活動は動物に触ることができなかったのと、対象物が小さいのとで、年少児には少々高度だったような印象である。最後のワークシートも年長児は積極的に取り組んでいたが、年少児にはこの振り返り活動そのものに積極的に取り組む様子が確認できなかった。実際に触れることなく見ただけの動きを、紙に書かれた文字と描かれた絵に置き換えて判断するという、具体的活動から抽象的活動へ転換することが難しかったものと思われる。

年中児になると、観察とワークシートをそれぞれ楽しんでしたが、まだ主体的に取り組むという様子ではなく、介在者の指示でやらされている印象であった。

それが年長児になると、ねずみが出てきた時点から積極的に集中し、ワークシートも配られるなり自分で読み、思い出しながらシールを貼る活動に主体的に取り組んでいて、介在者が「一緒にやるから待っていてね」という言葉かけは理解していても、すぐにやってみずにはいられないという空気感が醸し出されていた。

今日の活動は全体的にハイレベルな印象がある。五感ではなく、視覚と僅かな聴覚(時々音がした)のみに頼った接近で、それを紙ベースのクイズに答えるという置き換えも必要であり、年少児には少々高度な活動に思われた。そのためか、「かわいい」といった声や、楽しそうな表情もあまり確認できなかった。

しかしながら、学年が上がるに連れ、見るだけの活動でも集中する姿が見られ、介在者の指示に応じて特徴を掴もうとする姿が多く確認された。ワークシートはシールを貼るだけなので年長児には退屈かと思われたのだが、むしろ字が読めない年少児ほど楽しくないようで、介在者の指示のとおりに行っている印象だった。年長児になると自分で字を読み、絵と照合して正誤を確かめるという活動が楽しいようで、積極的に取り組んでいる様子が確認できた。

総じて、すなねずみという、あまり身近でない小動物を集中して観察できた、よい機会であったと感じた。

(5) 2022年9月14日(水): 小型犬との触れ合い2

1) 活動の概要と時間運営

今年度第五回となるこの日は、第一回と同じ

「小型犬との触れ合い」であった。以下の概要で運営された。

介在者3名

犬4頭

- ① くるみくん (プードルとキャバリアのミックス) (小型) 10歳
- ② さくらちゃん (プードルとピジョンフリーゼのミックス) (小型)
- ③ 風(ふう)くん (ミニチュア・ピンシャー) (小型)
- ④ BORUTO (ボルト) くん (ボーダーゴリー) (中型)

10:00～10:15 ほしぐみ (年少) 保育室にて

10:15～10:30 つきぐみ (年少) 保育室にて

10:30～10:45 にじぐみ (年中) 保育室にて

10:50～11:05 そらぐみ (年中) 保育室にて

11:10～11:30 やま1くみ (年長) 保育室にて

11:35～11:55 やま2くみ (年長) 保育室にて

活動の流れは全て同じで、以下のとおりである。

a. 幼児たちは定位置に座って待機、介在者の話を聞く。

b. 犬との正しい近づきかたと触りかたの指導を、犬に触る前に口頭で受ける。

<方法>

最初は握りこぶしで匂いを嗅がせる

→掌を開いて鼻先に近づける

→触る時は上から触らず、背中を首から下へ向かってそっと撫でる

→慣れてきたら頭も触って良い

→膝に乗せる

→大声を出さないようにする (犬が驚くため)

c. 2グループに分かれ、各1頭ずつを介在者が連れてきて順に触れ合いタイムを過ごす。

触れ合いの最初は、握りこぶしで匂いを嗅がせ、続いて掌で触る。これを基本に、学年が上がるに連れて接しかたが深くなり、今回は第一回から進展して全学年において最終的に膝に乗せるところまでに至っていた (小型犬のみ)。

2) 接触の様態

<年少>

ほしぐみでは、幼児のなかに犬を非常に苦手とする幼児もあり、泣いていやがる幼児もいた。風くんの話は「こわいよね」と言っている声が聞こえる。くるみちゃんは長い毛とカフェオ

レ色の穏やかな風貌と性格で、幼児の人気も高く、自然とくるみちゃんのほうに幼児が寄ってってしまう。年中、年長になれば班から離れてしまう幼児は見当たらないが、年少ではなんとなく見た目の怖い犬からは離れてってしまう。幼児たちは全体的に非常に静かで、介在者の指示に従いながら見ている。「かわいい～」という小さな声が幼児たちから出ているのが聞こえていた。第一回の時に小型犬と出会った初回には聞くことができなかった言葉である。

つきぐみでは導入で介在者が「ごあいさつを覚えている？」と問いかけても、殆ど返事は無い。BORUTO くんを見せ、BORUTO くんには触らずケージに戻し、このクラスでは、さくらちゃんと風くんが出てきた。介在者は、「きちんとトレーニングを受けているから、噛みつかないから大丈夫よ」とはっきり言っていたが、それでも尻込みする幼児が少しいた。介在者の話を頷きながらよく聞いている様子が見えるが、幼児からの質問や発言は非常に少ない。目の前の大きな動物にすっかり心を奪われたようになっている。

<年中>

にじぐみでは、「おそいよ～」と幼児たちから声が上がり待ちわびた様子である。介在者の説明をととてもよく聞いている。「さわっていいの？」との幼児の声に介在者が、「触られるの大好きだから大丈夫。きのうシャンプーしてドライヤーしてきたから綺麗よ。フワフワしているよ」と話すと、「わ～」と小さな声が上がる。「お座りした～」「つるつるしてる～」などと言いながら、自ら進んで触ろうとする幼児がいる。年少児には見られない姿である。幼児2名がととても積極的に介在者に話しかけ、犬に触ろうとしていた。介在者は幼児たちと話しながら、動物が嫌になったり怯えたりしないようにであろうか、幼児が強く迫っていくと犬を抱いて守るようにして擦っているのが確認できた。

そらぐみでは、説明を頷きながら聞いているが、「前にきたのだよね」など小声で隣の友人と話している。くるみちゃんが巡回してきたときに目が合った幼児がおり、見つめあって固まっていた。いなくなった後に「ぼくのこと見てた～」と隣の友人に話していた。幼児の様子は、とても緊張したようであったが、ドキドキしている感じが伝わって来た。

<年長>

やま1くみは、犬と介在者が入室したときにはとても静かであった。黙っているというよりも、空気感は静逸といった印象で、幼児たちの張りつめた空気が室内に充満していた。説明のあと、犬が回ってくると口々に「前、ジャンプしてたの見た」「白い毛が混じってるよ」「(風くんは)尻尾が短いね。くるみちゃんは長いね。お兄ちゃん、どうして尻尾が短いのがいるの？」などと話している。介在者が、「年を取ると犬も毛が白くなるの。おじいちゃんとかも白髪って言って髪が白くなるでしょ？わんちゃんも同じなの」と話したり、「おしゃれで切っちゃうの。中には骨があるよ。触ってみて」と触らせている。幼児たちは真剣な表情で介助者の話に耳を傾け頷きながら聞いている。「からだはピンクだよ」と幼児が語り掛けると介在者が「みんなの皮膚は厚いけど、わんちゃんの皮膚は薄い。だから毛で覆われているんだよ」と話したところ、幼児たちが一斉に自分の腕の皮膚をつまんで確認していた。「じゃ、近づいて見てみよう」などと介在者が声を掛けると、7人の幼児が一斉に犬に突撃してきて触ろうとするので、介在者は犬を抱きかかえて「そんな寄らないの、びっくりしちゃうよ。離れて、離れて」と幼児を制止していた。犬の尻や腹に興味のある幼児がおり、床にはいつくばって犬の腹部を覗いていた。



写真3 小型犬との触れ合い(年長児)

年長児の犬への迫る圧力は圧巻で、もはや介在者が犬を守っているという様態である。「これ、なんの種類？」「ねこちゃんよりわんちゃんのほうが頭がいいの？」「なにを食べさせてるの？(口に何かを入れているのを見て)」など、口々

に質問しており、介在者は質問攻めに遭っているという印象だった。

続くやま2くみは今回も幼児の積極性が目を引いた。最初に出てきたBORUTOくんに幼児の興味は一気に惹きつけられ、「かっこいいな～」と惚れている。「すごいこっち見た。びっくりした」「わんちゃん、わくわくだ」「かわいい」「いい子だね」「もこもこで気持ちいい」「毛が全部なくなると何色なの？」などと立て続けに介在者に質問していた。最後になっても「BORUTOくんにさわりたい」と犬を指名する幼児がおり、介在者が出してきて触らせてくれていたが、介在者の心配どおり激しい犬で、幼児が触るのはなかなか困難であった。

年長児の様子からは、科学的探究心の芽生えがしっかりと確認できる。幼児たちの発話は「かわいい」だけではなく、意外と静かに観察している姿が確認できる。

3) 全体をとおして

今年度になって犬に出会うのは2回目であった。今回、同行してきた犬は4匹であったが、全て4月にも出会っている犬たちで、今回は2回目の出会いである。ただし、1回目は犬に触れたのは年長児だけであったが、今回は全ての年代の幼児が犬に触れる機会を得た。

年少児は、(後述するが)家庭で犬を飼っている幼児は2クラス合わせて4名であり、1クラス平均2名と概算することができ、決して多くはない。また、家庭で飼っている犬種やサイズは不明であるし、家庭で慣れ親しんでいる犬と初めて出会う犬とでは全く異なる存在であろう。体形や顔貌がシャープな風くんに対しては特に怖いという印象を持った幼児が多く見られた。一方、年中～年長になると、フワフワと可愛らしい風貌の2匹だけでなく風くんやBORUTOくんといった犬種に対しても一定の興味関心を示す幼児の様子も確認できた。

第一回において犬との出会いを経験している幼児たちは、その経験を土台として一層、犬たちと接することができていた。その様子は第一回と同様、基本的に年中児は心情的、年長児は科学的な接触の様態を示していたのが興味深い。幼児の発話を聞いていても、年少児は言葉少なく静かであるのに対し年中・年長児のあいだから積極的な発言が確認された。年中児においては「わ～」「かわいい～」といった言葉が多く

聞き取れ、とにかく可愛くて感嘆しているであろう様態があちこちで確認された。年長児になると、発見したことを介助者や教諭に話したり、介助者に質問を投げかけたりする発言が活発に確認され、単に可愛いだけでなく科学的な分析眼をもって動物に接近している様態が確かめられた。

犬は、小型の水生生物などとは異なり、家庭飼育が難しく条件が厳しい。そうした動物に園で定期的に正しい方法で幼児が接触する機会を提供することは、とても意義深い。幼児は1年ごと、知的・情緒的に大きく成長し変化していく。この成長と並行して動物と触れ合う経験を定期的に持つことは、将来に向けて動物とヒトとの望ましい関係性を構築していく重要な基盤となるだろうことを確信した。

2. アンケート調査

(1) 教諭に対する調査

第一回と第二回の終了直後、教諭に対してアンケート調査を実施した。なお、教諭に対するアンケートは全て自由記述形式である。

1) 2022年4月27日(火)

質問項目は以下のとおりである。

- ① 触れ合い体験の方法(「アニマルシップ」の方法)について
- ② 動物とのかかわりと幼児の状態
- ③ コロナ禍における配慮と場所の設営
- ④ 教諭(担任)としての援助
- ⑤ 次回に向けて

夫々の質問について各学年担任教諭から得た回答は以下のとおりであった。

<年少担任>

- ① 3歳児にとって初めての体験だったが、クラスを5～6人の小グループに分け、触れ合いに余裕を持てた／触りかたやスキンシップのとりかたの丁寧な説明があって良かった
- ② 3～4人以外の殆どの幼児が怖がることもなく触れ合いを楽しんでいた／戸惑いを見せていた幼児も周りの友だちの様子を見て真似て触ったり、触りかたの約束事を守って試していた
- ③ 天気が悪かったため室内での実施となったが、グループ実践で幼児同士の距離も十分にとれていた／触れ合いの開始前と終了時

には手指の消毒をおこない、幼児たちが退室したあとは床も消毒して感染対策を徹底していた

- ④ 怖がる幼児やアレルギーの幼児も予めわかっていたため、担任はサブとしてかかわることもできた／幼児の発している言葉や感嘆の発声は大事にしたいと考え、共感を示すように心がけた

<年中担任>

- ① 数人ずつのグループに分けたので、一人ひとりが犬に触れ合う時間が多くなり、幼児たちは満足感を持てたようだ／久しぶりに生きた動物にじかに触れることができ、犬の動きや表情をじっくり観察できた
- ② 前年度も犬との触れ合いを体験しているため、触りながら犬に「フワフワだね」と話しかけたり、最初は「手をグーにするんだよね」と以前にしたことを覚えている幼児もいた／殆どの幼児が犬の名前を呼んで親しげに触れていた
- ③ 急遽、室内でおこなうことになったが、クラスの単位でグループ分けでおこなったため、密にならずに楽しめた／介在者自身もマスクとフェイスシールドをつけ、感染予防をしていた／日常保育でもおこなっている手指の消毒も丁寧におこなってくれた
- ④ 介在者が触れかたの約束事を聞いていなかったり、忘れてしまっている幼児には集中できるよう復唱したり、「そうするとイヤみたいだよ」と犬の気持ちを伝えたりして意識づけをしていた

<年長>

- ① グループ分けでおこなったので、一匹にかかわる幼児の人数が少なく、ゆっくりと触れる時間がとれてよかった／近い距離で触れ合うことができたので、犬の表情や気持ちまでくみとっている場面も見られた
- ② 前年度までに犬との触れ合いを何回か経験しているので、犬の名前を憶えていたり、触りかたをすぐに思い出したりして抵抗なく触っていた／介在者に質問したり、犬に対する理解を深めようとしていた
- ③ 社会的状況から、介在者には来園の朝に抗原検査を依頼した／園側の依頼を快く受け入れ、消毒にも心を配っておこなってくれたことは感染予防に繋がったと思う

2) 2022年5月24日(火)

今回の質問項目は以下のとおりであった。

- ① 幼児と動物とのかかわりと教諭(担任)の援助
- ② 介在者の状況(言葉がけ・態度・表情)
- ③ 前回(犬)との違い

夫々の質問について各学年担任教諭から得た回答は以下のとおりであった。

<年少担任>

- ① 幼児一人ひとりの膝にモルモットを乗せてもらい、モルモットは大人しかだったので殆どの幼児が怖がることもなく嬉しそうだった/教諭は、幼児の傍らに寄り添い幼児の気持ちに共感したり感想を訊いたりした
- ② どうしたら動物となかよくなれるかをわかりやすく教えてくれた/(モルモットの)目が赤いという幼児には、黒い目のモルモットもいることを教えてくれたり、笑顔で話してくれたりするので、集中して楽しんでいた/目の前のモルモットに関するクイズを出すなど、幼児たちを楽しませようとしていた
- ③ 前は大きな動物だったが今回は小さく、姿や形、表情から怖さを感じる幼児は少なかった/モルモットの名前が可愛らしく聞いたことのある名前だったので、終わったあともしっかりと憶えていた

<年中担任>

- ① 自分の膝に乗せてもらい、少し怖そうにしている幼児もいたが、友だちの触っている様子を見て優しく触れていた/順番が来るまでにやや待ち時間があったため、友だちの触りかたや大きなケースに入っているモルモットを見たりして自分の番を楽しみに待てるようにした
- ② 表情は笑顔が多く、幼児たちに親しみが持てるようにしていた/声かけが優しく幼児たちの質問にも丁寧にわかりやすく答えてくれた/モルモットの名前が「シャインマスカット」と聞いて「美味しそうだ」と喜んでいた
- ③ 前は一匹の犬に複数の幼児が触れたが、今回は自分だけで触ることができたので、約束事を意識しながら十分に触ることができた

<年長担任>

- ① 年少、年中時に触れ合っていることもあり、殆ど抵抗もなく触れ合っていた/首に一匹ごとにペイントされている理由や疑問に思ったことを尋ねたりして騒々しさはあったが、理解するよい機会と思うので、静止はしなかった
- ② 幼児たちから複数の質問が出されていたが、一つひとつ丁寧に幼児たちにわかる言葉で応じてくれていた/質問以外にもクイズ形式で新しいことや興味を示してくれそうな話題を選んでいく
- ③ 前は異なる小さな動物だったので、触れ合いかたの違いの他、小さい動物の飼育の仕方など、わかる範囲で応じてくれた

今回の教諭アンケートは自由記述式にて回答を得たが、総括して以下の点をまとめることができる。

・教諭は総合的に動物介在教育活動を肯定的に受け入れている。

・教諭は幼児の動物との接触の様態の学年による違いを明確に意識しており、自由記述の文に示されている。筆者らは全学年をとおして観察を実施し各学年の幼児と動物とのかかわりの変容について比較・確認しているが、筆者らが学年の特徴として認識したことが教諭の自由記述にも同様に記述されており、学年を経るにつれて幼児と動物とのかかわりが変容していっていることが教諭の目にも明らかであることを確認した。

教諭は動物介在教育の場面では補助者に徹して参与しているわけであるが、自由記述の文に見られる顕著な特徴として幼児の様態が多く記述されている点である。このことから教諭らは、動物介在教育の補助者を務めながら、幼児一人ひとりの様子や発話に十分な注意を向けていることが確認できる。幼児がどのような心情で動物と接触しているかを丁寧に見ているとともに、広義において今後の保育活動に生かしていけるよう注意深く活動を観察していることが理解できた。

(2) 保護者に対する調査

2022年5月～6月にかけて、保護者に対するアンケートを実施した。質問項目は以下のとおりであった。

- ① 本園入園前に動物介在教育が実施されてい

ることの認知度

- ② 動物介在教育を実施していることが園を選択する要因となったか
- ③ 家庭における動物飼育の状況
- ④ 飼育している家庭に対する動物種と数の問い
- ⑤ 飼育していない家庭に対する飼育しない理由
- ⑥ 家庭で動物園や水族館に出かける頻度

今回のアンケートでは自由記述欄は設けなかった。また、全園児の保護者から回答を得られたわけではなく、あくまで賛同ねがえる保護者に任意で回答して貰ったアンケートであり、且つ1家庭1回答と限定していないので1家庭で二人の子どものアンケートに回答している家庭も考えられる。こうした意味から厳密に研究資料となる回答ではなく、あくまで参考程度のものとする。得られた回答数は年少29、年中34、年長42であった。

回答は以下のとおりであった。

- ① 動物介在教育を実施していることについて入園前には知らなかった保護者は殆どおらず、年少では1、年中では2、年長では3のみが事前に知らなかったと答えている。ほぼ100%に近い保護者が事前に認知している。
- ② 動物介在教育の実施が園を決める要因になったかの問いについては、年少では「強い要因」ないし「多少の要因」合わせて21で「要因ではない」「わからない」合わせて8を倍以上、上回っている。年中では「強い要因」「多少の要因」合わせて25で、「要因ではない」「わからない」計9の3倍弱、年長では「強い要因」「多少の要因」計37で、「要因ではない」「わからない」5を7倍ほど上回っている。学年が上がるに連れて「強い要因」「多少の要因」との回答の率が上がっていていることは、入園前の時点で園決定の要因になったかの記憶を辿ってではなく、現時点においてどのように感じているかが数字に表れているものと考えることができる。園児として本園に通わせる過程において、年々、保護者から動物介在教育が肯定的に捉えられていると考えられる。
- ③ 自宅で何等かの動物を飼育しているかの質問に対しては、現在において飼育している

家庭は年少7、年中7、年長8で、以前には飼育していたが現在はしていない家庭は年少5、年中3、年長6である。現在にも飼育していない家庭が年少17、年中24、年長27で、ありとあらゆる動物についての質問であることを考慮すると、飼育している家庭は多くはないと判断できよう。

- ④ 上記の質問に併せて飼育している動物について問うたところ、年少では犬1頭が4、ハムスター、亀、カブトムシ、クワガタ、メダカが各1の回答、年中では犬1頭が5、金魚・猫が各1の回答、年長では犬1頭が3、猫1頭・金魚が各2、他に熱帯魚、メダカ、テグー（見た目がネズミに似た齧歯類）が各1の回答であった。飼われている動物の延べ総数が何等かの飼育をしている家庭数を上回っていることから、飼育をしている家庭は2種類以上の動物を飼育している可能性が推察される。犬・猫は不動の人気を誇っていることは言うまでもないが、これに加えて水生生物も飼いやすい動物であることがわかる。
- ⑤ 飼育していない理由としては、住宅事情（マンションであるため飼えない）が年少4、年中8、年長13で、アレルギーが年少4、年中4、年長6であった。一方、「特に飼う気はない」は年少7、年中4、年長7、「自宅では飼いたくない」が年少2、年中9、年長6の回答であった。この数値の分析であるが、住宅事情・アレルギーなど「飼いたくても飼えない」状況にある家庭が年少8、年中12、年長19と各学年ともに一定数あると同時に「飼う気はない」「飼いたくない」の合計数の年少9、年中13、年長13とほぼ同数である（年長では若干の差があるが）ことを見ると、飼いたくても飼えないというわけではなく「積極的に家庭での動物飼育は考えない」家庭も多くあることが読み取れる。
- ⑥ 動物園や水族館など動物を見ることができ施設に出かける家庭は、「よく行く」（月に一回）家庭は年少3、年中6、年長4、「たまに行く」（2～3か月に一回、半年に一回くらい）家庭が年少18、年中18、年長32、「殆ど行かない」が年少6、年中3、年長4、「全く行かない」が年少2、年中・年長ゼロ

という結果となった。「よく行く」「たまに行く」を合わせると年少21, 年中24, 年長36と増えていく傾向にある一方, 「殆ど行かない」「全く行かない」家庭の総数は年少8, 年中3, 年長4と著しい減少傾向にあることが明らかである。子どもの年齢が上がるに連れてこうした施設に出かけることが増えることは容易に理解できるが, 年長では「よく行く」「たまに行く」家庭の総数が36と85%を超えており, 本園における動物介在教育その他の動物と接する活動が, 子どもと保護者の双方に, 動物に対する興味関心を喚起していることが伺える。

以上, 保護者に対する今回のアンケート結果を客観的に判断するためには, 動物介在教育を実施していない園, 都心ではなく首都圏周辺地域にある園で同様のアンケートを実施して比較することが必要であるが, 今回の保護者アンケートの結果から想定できることとして, 以下の点が挙げられよう。

- ・動物介在教育を本園が実施していることは入園前から殆どの保護者によって認知されている。
- ・動物介在教育は保護者によって概ね肯定的に受け止められている。
- ・家庭での動物飼育率は高くなく, しかも何等かの事情によって飼いたくても飼えないのではなく, 家庭での飼育に関しての積極性は確認できない。
- ・家庭での動物飼育には前向きではないものの, 園における動物介在教育だけでなく家庭でも動物園や水族館に出かけて子どもに動物と接する機会を積極的に持っている家庭が多い。

これらのことから総合して, 家庭での動物飼育はしないものの, 総じて園における動物介在教育は保護者から肯定的に捉えられていること, 動物介在教育の教育的効果もあつてか家庭でも動物飼育施設に出向き子どもと動物との触れ合いには意欲的な家庭環境が育成されていることが伺える。

IV. 考察

以上, IIIにおいて, 5回の動物介在教育の実際の紹介と, 3回のアンケート調査(うち2回は教諭対象, 1回は保護者対象)の結果分析をおこなった。最後に全体的な考察をして終わりたい。

動物介在教育は, その意義や効果, 方法について研究している専門家によって立案・計画・実施されている教育活動である。このことから, その実施は確かな理論によって構築されたものであり, 昨年度の研究報告に続き今回も, その成果と意義を再確認することとなった。

第一に, このプログラムは, 幼児に紹介する動物に幼児が初めて触れることを第一義の前提としており, その種の動物に接する時に必要な手順を幼児に正しく伝えてから活動に入ることとなっている。接する動物が生物である以上, こうした手順を正しく踏ませることは必要なことであり, 命ある生物に触れる際の最低限のマナーである。この手順を, 言葉をとおして, また介在者の姿をとおして幼児に伝えることは, 動物に触れる人間としてとても大切なことである。幼児は3年間にわたって繰り返しこの手順を教えられることにより, その方法は身体に入り, 今後, 動物園や知人宅などで動物に接する時に生かされるであろうし, もっといえば成長して地球上の全ての生物に対する畏敬の念をもつことになるであろう。

第二に, 動物への接し方は年齢が上がるに連れて変容を見せる。年少では初めての出会いに驚き, 少々の恐怖感も抱きつつ動物に接するが, その際に教諭や介在者など信頼できる大人がいることにより恐怖感が和らぎ動物に接してみることが可能となる。年中では動物に対する愛情の念が発生し, 可愛い, 接すると心が躍るなどの感情を経験して, 動物と親しんでいく。この際にも教諭や介在者の援助は大きい。年少時からの動物との交わりが土台となって, こうした感情が誕生する。年長ともなれば動物とのかかわりの方法もひととおりで習得し, 動物も何度か再会している相手となる。年中までに獲得した愛情の念を基礎として, 次には動物に対する科学的探究心や知的好奇心が芽生え, 動物に詳しい介在者に多くの質問を投げかけながら知識を獲得していく楽しさをも味わうことになる。そこには変わらず信頼を抱き安心できる教諭の存在があり, これ無くしては全て成立しない。このように, 動物と幼児との出会いは簡単なものではなく, 様々な立場の大人が多様な方法で援助することにより成立するものであることを改めて確認した。

第三に, 動物介在教育は, 「見る」「聞く」と

いった感覚のみならず、「触る」「においを感じる」などの感覚も同時に発揮させ、五感をとおして動物を感じ取ることができる。これに加えて様々な製作やクイズなども盛り込み、段階的に知的発達にも寄与するように立案・計画・実施されている。動物と幼児との出会いにも多様なあり方があるが、その一角をなす動物介在教育は、幼児（ヒト）と動物との望ましい関係を構築する一つのプランとして十分な価値を有するものであると改めて判断できよう。

今後も本園では動物介在教育が継続運営されていくが、常に幼児と動物との関係の様態に目を配り、より一層の充実が期待できるものとなることを願うばかりである。

【謝辞】

研究を快諾し協力して頂いた帝京めぐみ幼稚園の園長，教諭に感謝を述べるとともに，アンケートに協力して頂いた保護者にも御礼を申し上げます。

【参考文献】

平成 29 年公示「幼稚園教育要領」文部科学省
朝日新聞記事

2022 年 7 月 14 日（木）日刊 耕論「動物とのふれあい必要？^[1]」

2022 年 7 月 31 日（日）日刊 フォーラム「動物とのふれあい必要？^[2]学校では」

Practice of Animals Assisted Education in Kindergartens

—Change in the Nature of Young Children's Relationships with Animals—

Rieko NAGAI¹⁾ • Ayako MIZOGUCHI²⁾

1) Department of Early childhood Education, Teikyo Junior College

2) Teikyo Megumi Kindergarten

【abstract】

【Purpose】 The Teikyo Megumi Kindergarten has been practicing "animal-assisted education" for 17 years since 2006. This practice is an educational activity conducted in collaboration with the Animal Assisted System Laboratory of the Department of Children's Studies, Faculty of Education and Human Sciences, Teikyo University of Science, and has consistently been of great interest to preschool children and their parents since its inception. Last year, we focused on the changes in the awareness of the caregivers involved in this activity. This year, we will focus on the young children and attempt to examine the changes in the way they interact with animals.

【Methods】 We observed all five sessions of "animal-assisted education" held from April to September 2022, and drew the transformation of the relationship between young, middle, and old children and animals from photographs and observation records. In addition, two questionnaires were sent to the teachers and one to the parents, which were used as reference for observation and analysis.

【Results】 There were significant differences in the way in which young, middle, and old children interacted with animals, depending on their age stage of development and their experience with animal-assisted education. In other words, some of the younger children had their first contact with animals, and in general, their fear of contact with animals was still evident, so the support of the teachers was essential. The middle-aged children seemed to have developed an affection for animals, and were building a relationship with them, imagining the ecology of animals in the context of their own lives, but the support of caregivers and teachers was still essential. The older children showed scientific inquisitiveness and intellectual curiosity toward animals, and actively created their own relationships with animals.

【Discussion/Conclusion】 The following points were confirmed through this survey: 1) It is important for young children to learn the correct attitude and methods of interacting with animals in their early years, when they are in the early stages of approaching familiar animals as living things. 2) As shown in [Results] above, there was a marked difference in the way the children interacted with the animals depending on the grade level. The younger the children, the more important the support of the teacher is, but as the children get older, the individual differences in the way they interact with the animals become more pronounced, and the support of the caregivers as professionals becomes more important. 3) Caregivers not only devise programs that allow children to interact with animals using all five senses, but also provide intellectual and formative approaches, and attempt to build desirable relationships between young children (humans) and animals through a variety of activities.

【Key words】 Animal Assisted Education, young children, Kindergarten teaching procedures